

パネルー2 修正

からめきの瀬を渡る

江戸川の柴又船着場付近



北総線の先は市川市



矢切の渡し



自主生生物調査団メンバー 初めて渡る



波蝕台



葛飾区史によれば、からめきの瀬が記述されている史書としては、「関八洲古戦録」に、「国府台は、北西の切岸高く険なれども、東南はなだらかにして、陰より廻りて敵の後ろより不意をおそい相図を以って大手搦め手より攻め立てなば、勝利疑いあるべからずとて、葛西筋より市川の川上、からめきの瀬を渡して、真間国府台の東西へ押し着けたり」と、また、国府台合戦物語、小田原勢葛西に着陣の事、の件に「巳に小田原の評定終えて、正月六日未の刻計りに、先陣ひづめを飛ばせて人馬不休うつまに、先陣は七日の巳の刻斗りに、下総の葛西、芝又、からめきの向こうに付にけり、後陣は大將氏康、武州六郷の川をわたり、品川大森に陣を取り、凡そ其の勢三千余駒とぞ聞ける、先陣の中よりも遠山富永は先をかけんと、利根川辺、芝又より三小岩、篠崎迄陣取り、明るる八日利根川を渡らんことをはかりける。巳に房州軍勢北条方葛西に着と聞き、かの川を打ち立て、先陣は国府台栗山矢喰にささえたり、正木大善軍者第一の武者なれば栗山立てだしへ廻り立ち並べたるかわら人形のかげより、からめき芝又を見渡せば、諸軍勢残らずみちみちたり」とあります。

この国府台合戦物語は、合戦のあった永禄7年から約150年後、江戸の宝永年間(1700年頃)に国府台付近に居住した人が、土地の古老の伝承をもとに、合戦を物語風にしたもので、作者不詳ということがあります。つまり、直接的な合戦当時の記録ではないので、史実はどうであったか議論の残るところですが、物語が書かれた1700年当時、江戸川にからめきの瀬と呼ばれる浅瀬があったことは、事実であろうと思います。

(引用文許諾有)

柴又エコロジー2000 <http://www.vheart.ne.jp>